

# 18 世紀ロシアにおける「ギリシア」表象の史的背景 ——「古典古代と非古典古代の混交」と「帝国の遷移」——

鳥山 祐介

はじめに

近代ロシア国家の基礎が築かれた 18 世紀は、ロシア国家のイメージが新たに築き上げられていく時代でもあった。

筆者はこれまでに、二つの論考において、エカテリーナ二世の治世初期を取り上げ、頌詩や宮廷行事といった当時の「体制文化」の枠組の中で新たなロシアのイメージが涵養されていく過程について検討した。1766 年にペテルブルクで行われた騎馬競技とそれを題材としたペトロフを対象とした論稿では、こうした行事や頌詩が「帝国の遷移」という政治理念を 18 世紀ロシアに移植し、視覚化するものであったことについて論じ、<sup>1</sup> また第一次対トルコ戦争（1768–1774）に題材を取った当時のロシアの文学作品を扱った論稿では、そうした作品の多くにおいてビザンツ帝国と古代ギリシアという二重のイメージを纏わされた「ギリシア」のイメージが頻出し、それが両文明の後継者としてのロシア帝国の権威を正当化していったことを明らかにした。<sup>2</sup>

本稿は、構成や紙面の都合からこれらの論稿に含めることのできなかつた歴史的コンテクストに関する説明を第一の目的としており、補遺的な性格を持つものともいえる。

これまでの考察において軸となっていたのは、エカテリーナ二世の治世初期の政治や文化において、古代ギリシアと 18 世紀ロシアとのアナロジー、ならびに複数のカテゴリーの要素の混交が頻繁に行われたという事実であったが、ここではさらに、こうした現象の原型の一部が、ヨーロッパ、ロシア文化の長い歴史の中に見出されるという点に注意を向けたい。これまで試みてきたのは、ロシアの新たなイメージが作られるに際し、個々の政治的・社会的現実には詩的伝統や詩人の想像力が絡み合っていく過程を明らかにすることであったが、上記のような大きなコンテクストに様々な角度から光を当てておくことは、そうした趣旨にも適うものと考えられる。

従って、本稿ではまず、中世以降の西欧文化における古典古代の継承という主題を、美術などに現れた「古典古代と非古典古代の混交」という現象と、「帝国の遷移」理念とい

<sup>1</sup> 拙稿「エカテリーナ二世の『壮麗なる騎馬競技』とペトロフの頌詩——近代ロシア国家像の視覚化に向けた 1766 年の二つの試み」『スラヴ研究』54 号、2007 年。

<sup>2</sup> 拙稿「第一次対トルコ戦争期（1768–74）のロシア文学——「ギリシア」表象と戦争イデオロギーの変遷」『ロシア語ロシア文学研究』39 号、2007 年。

う二つの問題に即して概観したい。続く部分では、西欧でのこうした潮流に対応する現象が、エカテリーナ即位以前までのロシアでどう現れたかを素描し、さらにエカテリーナ期のロシア国家表象において重要な役割を担うことになる「古代ギリシア」という概念がどのように認識されていったかという問題にも注意を向ける。

こうした文化的背景を考慮に入れることで、これまでに取り扱った、エカテリーナ二世の騎馬競技や第一次対トルコ戦争期の詩作品におけるロシア国家の表象をめぐる問題を、よりはっきりとした歴史的文脈の中に位置付けることができると考えられる。

## 1. ヨーロッパにおける古典古代の継承

### 1-1. 古典古代と非古典古代の混交

ヨーロッパ文化史の随所に様々な形をとって現れる主題の一つに「古典古代の再生」というものがある。言うまでもなく、これが一つの理念としてヨーロッパ人の世界像の転換に至るほど大きな影響力を及ぼしたのはルネサンス期だが、同時にそうした潮流は、中世以来の文化と連続性を有するものでもあった。

パノフスキーが述べるように、西欧では中世にも「古代の伝統が完全に断絶してしまうということは」なく、「文学・哲学・科学・美術上の古典の諸概念は、数世紀を通じて生き続けた」<sup>3</sup>。そのことを強く裏付けるのが、彫刻などの視覚美術において、しばしば古典古代の「モチーフ」が、キリスト教的「テーマ」を表現するのに用いられたことである。

こういった例としてパノフスキーは、ヴェネツィアの聖マルコ教会のファサードに見られる二つの浮彫、『エリュマントスの猪を運ぶヘラクレス』（3世紀）と『救済の寓意』（13世紀）を挙げている。この一対の浮彫のうち、一方はギリシア神話の英雄、ヘラクレスを描いたものだが、もう一方の浮彫は、ほとんど同じ構図を「救済の寓意」というキリスト教的テーマの表現に転じたものである〔図版1〕。他にも、旧約聖書のダヴィデ王を表現するのにオルフェウスの像が転用されたり、冥界からケルベロス連れ出すヘラクレスの型が、地獄の<sup>リンボ</sup>辺土からアダムを引き出すキリストを描写するのに用いられたり、アトラスのモチーフが福音書記者の像に用いられたりするなど、視覚美術の領域のこうした例は枚挙に暇がない。

一方で逆のケースもある。即ち、古典のテーマが、聖書や同時代の風俗などに基づく非古典的モチーフによって表現される場合である。こうした事例は、写本画家が古典を題材とする物語に挿絵をつけるときのように、美術家が彫刻作品など直接目に見える手本を持たず、文献資料の中の記述をそのままイメージ化する場合などによく見出される。パノフスキーが言及している例としては、ダヴィデとその前に立つ預言者ナタンに似た二人が描かれた『ディードの前のアエネアス』（10世紀）、文頭に十字架を持つ銘文があしらわれたゴシックの墓石の上でピュラムスを待つティスベを描いた『ピュラムスとティスベ』

<sup>3</sup> 以下この節で挙げる事例のうち、特に注釈のないものは以下を参照している。エルヴィン・パノフスキー（浅野徹、阿天坊耀、塚田孝雄、永澤峻、福部信敏訳）『イコノロジー研究（上）』筑摩書房、2002年、57-81頁。

(1289年)<sup>4</sup>のほか、メディアが中世の王女として描かれた例、ユピテルが中世の裁判官として描かれた例などがある。

さらに時代が下ると、神話上の人物が「教訓的」に利用されることが頻繁となり、その中でキリスト教の信仰と関係づけられることも増えてくる。ピュラムスがキリスト、ティスベが人間の魂、ライオンがその衣を汚す「悪魔」として解釈されたり、サトゥルヌスが聖職者の行状を示す範として用いられたりした。

この種の著作の中で重要なものとしては『教訓化されたオウィディウス』（1340頃）がある。ここではキリストが鹿に変えられ自らの猟犬に食い殺される猟師アクテオンと同一視され、プロセルピナを探すケレスは信仰を求める教会と同一視される。ベアーが述べるように、まさにこうした古代神話と聖書の物語とのこうしたアナロジーが、学校演劇や詩学・修辞学の教科書の翻訳を通して18世紀ロシアにも入り込んでくるのである。<sup>5</sup>

## 1-2. 「帝国の遷移」

中世ヨーロッパにおける古典古代の再生の問題を考える上で、上述の美術や文学における「古典と非古典の混交」とともに興味深いのが、「帝国の遷移 *translatio imperii*」という政治理念である。

「ローマ帝国の権力が他の国へと移行していく」というこの理論は、「神は時と季節を変じ、王を廃し、王を立て」（ダニエル書 2:21）「覇権は民族から民族へと移り変わるが、その因は不正と不遜と利得」（ベン・シラの知恵 10:8）<sup>6</sup>など、聖書や外典の記述に神学的根拠を有している。クルティウスによれば、この考え方は「中世の歴史理論の基礎を」成すものであり、シャルルマーニュが800年にローマ皇帝として戴冠し、帝国を復興したことは、まさにローマ帝国が別の民族に伝達、「遷移 *translatio*」されたことを示す事件として理解されたという。<sup>7</sup>

こうして「帝国の遷移」はヨーロッパの政治思想の一つの核となっていく。ダンテやペトラルカの帝国理念はこの理念を基にして構築された。ヨーロッパ内外の政治地図に転機をもたらしたカール五世の登場は、この理念が新しい局面を迎える契機でもあった。アリオストの『狂気のオルランド』（1516）は新たなカール大帝（シャルルマーニュ）たるカール五世を賛美する作品であり、ここでは皇帝がアウグストゥス、トラヤヌス、マルクス・アウレーリウス、セウエールスの帝冠を受け継ぐ者とされた。<sup>8</sup>

フランスでも、国王はしばしばローマ皇帝の後継者とされた。フィリップ四世期の法学

---

<sup>4</sup> ピュラムス（ピュラムス）とティスベの神話については以下を参照。オウィディウス（中村善也訳）『変身物語（上）』岩波書店、1981年、139-145頁。

<sup>5</sup> Stephen Lessing Baehr, *The Paradise Myth in Eighteenth-Century Russia Utopian Patterns in Early Secular Russian Literature and Culture*. (Stanford: Stanford University Press, 1991), p. 204.

<sup>6</sup> 日本聖書学研究所編『聖書外典偽典第二巻：旧約外典II』教文館、1977年、105頁。

<sup>7</sup> E.R.クルティウス（南大路振一、岸本通夫、中村善也訳）『ヨーロッパ文学とラテン中世』みすず書房、1971年、35-36頁；横山安由美「聖杯物語群と *translatio imperii*——歴史記述との接点から」『仏語仏文学研究』（東京大学仏語仏文学研究会）8号、1992年、3-4頁。

<sup>8</sup> フランシス・A. イエイツ（西澤龍生、正木晃訳）『星の処女神エリザベス女王』東海大学出版会、1982年、49頁。

者ピエール・デュボワが唱えたところによれば、神聖ローマ皇帝は、その選出がしばしば戦争の原因となったことからしても、平和と正義の保護者としてのローマ帝国の後継者には適しておらず、同じくシャルルマーニュの血筋を引くフランス王権こそローマ的普遍性の継承者に相応しいという。<sup>9</sup> また、16世紀の詩人ロンサールは、トロイアの英雄ヘクトルの息子フランク스가、トロイアを逃れてからフランス初代国王たちの伝説上の民族を創り上げたという神話をもとに、叙事詩『フランシアード *Fransiade*』（1572）を物したが、これはいわばウェルギリウス『アエネーイス』のフランス版であり、当時のフランス王シャルル九世をアウグストゥス帝と重ね合わせることで称賛する作品であった。<sup>10</sup>

また英国でも、アエネーアスの親戚筋にあたる神話上の人物ブルートゥスが新トロイアとしてのロンドンを建設し、この人物の子孫としてブリテン歴代の国王がその血を引くことになったという物語が、チューダー朝神話を成すものとして、エリザベス朝詩人の大半に受け入れられていた。<sup>11</sup>

このように、ヨーロッパでは「帝国の遷移」という中世以来の歴史理論が同時代と古典古代との類推を生み、それはしばしば文学作品にも反映された。このように、古典古代の継承という理念は政治的な局面でも強く意識されていたのである。

## 2. ロシア国家の形成と「ギリシア」の再生

### 2-1. ロシア版「帝国の遷移」

ロシアにも、上述の「帝国の遷移」に対応する理念が古くから存在した。

例えば、16世紀初頭にプスコフの修道士フィロフェイが書簡の中で表明した「モスクワ＝第三のローマ」説は、「聖なる教会」を通したローマ、コンスタンティノーブル、モスクワの継承関係を唱えたことでよく知られており、とりわけここに包含されているビザンツ帝国とモスクワ国家との連続性という理念には、中世ヨーロッパの「帝国の遷移」との共通性を見ることもできよう。とはいえ、教会中心的な志向を持つこの理念は、モスクワ国家の公式な政治理念とはなりにくいものであった。

モスクワ国家がより積極的に取り入れた政治理念としては、「アウグストゥス後裔伝説」と「モノマフ帝冠伝説」の二つが知られる。前者は、キエフ・ルーシの始祖リューリクをローマ皇帝アウグストゥスの親族の子孫とすることで、歴代のモスクワの君主をアウグストゥスの後裔と位置付ける伝説であり、後者は、リューリクから第八代目にあたるキエフ大公ウラジーミル・モノマフがコンスタンティノーブルを攻めた際、元来アウグストゥス帝のものであった帝冠を時のビザンツ皇帝から譲り受け、このとき帝権の標章がロシアへ移行したという伝説である。

これらは、16世紀初頭にトヴェーリの僧スピリドン・サヴァによって書きとめられ、の

<sup>9</sup> フランシス・A. イエイツ（西澤龍生、正木晃訳）『星の処女神とガリアのヘラクレス』東海大学出版会、1983年、3-5頁。

<sup>10</sup> 同上、19-23頁。

<sup>11</sup> イエイツ『星の処女神エリザベス女王』、102頁。

ちにモスクワ政府当局により改作された『ウラジーミル諸侯物語』で広く知られることになった。これらの伝説を特に頻繁に利用したのが16世紀後半のイワン四世であり、彼は、その遺言の中で「モノマフの冠」をモスクワの君主の帝冠として記述し、また彼の戴冠式の『式次第書』の序文には、上記の『ウラジーミル諸侯物語』の中のモノマフ帝冠伝説の部分がほとんど取り入れられたという。<sup>12</sup>

ピョートル一世期は、古典古代文化が「近代西欧文化とのアマルガム」として受容された時代である。<sup>13</sup> しかし「帝国の遷移」という理念が、西欧のカトリック文化圏においてのみならず、中世以降、西欧と歴史的歩みを大きく異にしてきたモスクワ国家でも同時進行的に育まれてきたという事実も、看過することはできない。

ピョートルは1700年にユリウス暦を採用し、1703年に「第二のローマ」を暗示する「聖ペトロの町」という名称を新首都に与え、さらに「元老院」(1711年)「参議会」(1717-1719年)といった名称の機関を設置し、1721年には「皇帝」の称号を得る。これらの点に、彼が新国家の建設者としてローマ帝国のイメージを重視していたこと、古代ローマ帝国からの「帝国の遷移」の系譜の中にロシア国家を位置付けようとしていたことの証左を見ることは容易であろう。<sup>14</sup>

ただここで注意しておきたいのは、こうしたローマ帝国とロシア帝国とのアナロジーが、ラテン語を通して西欧の政治文化と結びつくものであるのみならず、モスクワ国家以来の理念の延長という要素をも同時に含んでいたという点である。即ち、古代ローマのイメージは、近代西欧文化のみならず、モスクワ国家の政治文化とのアマルガムとしても受容されていったのであった。

## 2-2. ロシアにおける古典古代と正教文化との混交

一方、西欧の視覚美術などに見られた「古典的要素と非古典的要素の混交」は、ロシアでも正教文化と古典古代文化の混交という形で現れている。

この問題については、ジヴォフ＝ウスペンスキーの論文「17-18世紀ロシア文化史における古代異教の変容」に詳しい。<sup>15</sup> ロシアでは古くから古典古代の神話的モチーフが正教信仰の敵と位置付けられ、特に17世紀半ば以降には西欧文化のイメージと結びついて、正教会の立場から宗教的意味付けがなされた。ゴリコフの伝えるところによれば、ピョートル一世がヴォロネジに滞在した際に当地の主教ミトロファンを家に招いたところ、皇帝の家の前に古代の神々の彫像が立っていることを理由に主教が招待を断り、皇帝は彫像を片

<sup>12</sup> 栗生澤猛夫「補説19：モスクワ・第三ローマ理念とアウグストゥス後裔伝説——『ビザンツの遺産』と『キエフの遺産』」、田中陽兒、倉持俊一、和田春樹編『世界歴史大系 ロシア史1——9～17世紀』山川出版社、1995年、203-206頁。

<sup>13</sup> Кнабе Г.С. Русская античность. М., 2000. С. 102.

<sup>14</sup> ロシアにおける「帝国の遷移」理念の現れに関して、詳しくは Stephen L. Baehr, “From History to National Myth: *Translatio imperii* in Eighteenth Century Russia,” *Russian Review* 37, no. 1 (1978), p. 1-14; Прокураина В.Ю. Мифы империи. Литература и власть в эпоху Екатерины II. М., 2006. С. 11-56等を参照。

<sup>15</sup> Живов В.М., Успенский Б.А. Метаморфозы античного язычества в истории русской культуры века // Из истории русской культуры. Т. 4 (XVIII-начало XIX века). М., 2000. С. 449-535.

付けることを余儀なくされたという。<sup>16</sup> このように、古典古代文化にキリスト教信仰と相容れない悪魔的要素を見る解釈は、ピョートル期にも根強く残っていた。

とはいえ、ピョートル期には、上述のようにローマ帝国のイメージを志向する新たなロシア国家の建設が進んでいったことと平行して、建築やレリーフ、頌詩、国家行事など、文化の諸局面に古典古代的意匠が取り入れられた。1696年にピョートルがアゾフでの勝利からモスクワに帰還した際にはカール五世やアンリ四世と同じ要領で凱旋式が執り行われ、カエサル有名な文句「来た、見た、勝った」を盛り込んだ詩が凱旋門から朗読された。また、古代神話・古代史に基づく様々な象徴を840点の挿絵とともに解説した書物『シンボルとエンブレム』のロシア語版及び主要西欧語版が、1705年にピョートル自身の命によって出版されたことは、こうした象徴化が「上から」積極的に行われたことを示している。<sup>17</sup>

興味深いのは、こうした過程の中で古典古代的要素とキリスト教的要素の混交が盛んに行われていくことである。例えば、ズーボフ、ピカルトの手になるコンクリュージャ『神により結ばれた至高なる皇帝夫妻の絆に』（1715）<sup>18</sup>では、エカテリーナ一世が自らの守護聖人である聖カタリナの傍ら、ローマの戦士の衣装に身をまとったピョートルの向かい側に描かれた〔図版2〕。また、学校劇『リヴォニアとインゲルマンランドの解放』では、ユピテルとアポロンが庇護する双頭の鷲（ロシア）と獅子（スウェーデン）との戦いが、モーセとファラオとの戦いに准えられた。<sup>19</sup>

また、上述した1696年の凱旋式では、マルスやヘラクレスの像が飾る凱旋門に「皇帝コンスタンティヌスの凱旋 *возврат с победы царя Константина*」「不信心なローマ皇帝マクセンティウスに対するコンスタンティヌス帝の勝利 *победа царя Константина над нечестивым царем Максентием Римским*」といった句を織り込んだ布が掛けられた。<sup>20</sup> これは、ピョートルをローマ皇帝コンスタンティヌス（在位306–337）に准えるものだが、この皇帝が313年のミラノ勅令によってローマ帝国のキリスト教化への道を切り開いたこと、新首都コンスタンティノーブルの建設によってローマ帝国がビザンツ帝国へと転換する契機を作ったことを考えると、この修辭にも古典古代的主题とキリスト教的主题との融合という要素が含まれていると考えられる。コンスタンティヌスと争ったマクセンティウスに形容詞「不信心な」が冠せられていることは、この可能性を裏付けている。

さらに、1743年にロモノソフによって作られた頌詩では、ピョートルが以下のように「神」と呼ばれる。

<sup>16</sup> Живов, Успенский. *Метаморфозы античного язычества*. С. 476–478.

<sup>17</sup> Кнабе. *Русская античность*. С. 100–103.

<sup>18</sup> 「コンクリュージャ *конклюдия*」は、17世紀末からキエフやモスクワのアカデミーで発展した版画ジャンルのひとつで、典型的なものは、聖人や神々が描かれた天空と町や戦争や儀礼が描かれた地上から成る構図を特徴とし、学問的な議論の綱領を寓意的に示すものであった。ピョートルは、このジャンルの手法を皇族が描かれる銅版画に取り入れ、皇帝の聖化に利用した。Richard S. Wortman, *Scenarios of Power: Myth and Ceremony in Russian Monarchy*, vol. 1 (Princeton: Princeton University Press, 1995), p. 64–65.

<sup>19</sup> Кнабе. *Русская античность*. С. 103.

<sup>20</sup> Живов, Успенский. *Метаморфозы античного язычества*. С. 487–488.

«Он Бог, он Бог твой был, Россия,	「彼は神、彼はお前の神であった、ロシアよ
Он члены взял в тебе плотския,	彼はお前の中で肉の四肢を取り
Сошед к тебе от горьних мест;	高さ所よりお前のもとに降りてきた <sup>21</sup>

大文字で始まる「神 Бог」という語や、神のキリストとしての受肉、降誕を連想させる「肉の四肢を取り」「高さ所より降りてきた」といった表現は、ピョートル大帝がキリスト教の唯一神に准えられていることを示しているが、一方でこれらの詩句がマルス、ミネルヴァといったローマ神話の神々が現れるコンテクストの中にあることを考慮に入れば、ここではむしろ、古典古代の神々とキリスト教の神のイメージが意図的に混交されていると解釈される。<sup>22</sup>

こういった「古典古代的要素とキリスト教的要素の混交」を考える上で注意を留めておきたいのは、正教会の助力を得た 17 世紀以降のロシア文化が、ウクライナなど西部地域の影響を強く受けていたという事実である。後にロモノーソフなど多くの知識人を輩出するモスクワのスラヴ・ギリシア・ラテンアカデミーは 1667 年に設立されたが、その基礎となったキエフのアカデミーは、ピョートル・モヒラによって 17 世紀前半に設立されていた。

興味深いのは、モヒラが採り入れたイエズス会の教育システム中の修辞学、詩学の課程において、古代神話に基づくアレゴリーの使用に重点が置かれていた点である。これらの学校で作られた詩では、早くも 1630 年代からこうした古代神話とキリスト教を融合させる動きが生まれている。また、17 世紀よりこれらの学校のカリキュラムに組み込まれていた「学校劇」のジャンルでは、古代神話へのこうしたアプローチが特に頻繁に見られた。<sup>23</sup>

ピョートル時代には、プロコポーヴィチ、ヤヴォルスキー、ブジンスキーといったウクライナ出身の聖職者たちが重用されたが、カトリック文化圏と繋がり深い彼らがピョートルのもとで近代化を担ったことは、上述のバロック的修辞がロシアの公式文化の中に積極的に採り込まれる契機となった。18 世紀に盛んに書かれる頌詩の初期形態である「頌歌説教」を産み出した聖職者たちがこうした混交の担い手となったことは、18 世紀ロシアの公式文化の性格を考える上で大きな意味を持つ。<sup>24</sup>

### 2-3. 17-18 世紀のロシアと「古代ギリシア」

ところで、このように古典古代文化が再解釈されていく中で、「古代ギリシア」と「古代ローマ」との峻別はなされていたのだろうか。

正教を奉じるロシアでは、ビザンツ帝国から流入したギリシア文化が外国文化として長らく支配的であったが、17 世紀にはポーランド、ウクライナといった西部地域よりラテン

<sup>21</sup> Ломоносов М.В. Полное собрание сочинений. Т. 8. М.-Л., 1959. С. 109.

<sup>22</sup> 拙稿「ロモノーソフにおける崇高——『聖化』の修辞学」『ロシア 18 世紀論集』2 号、2002 年、15-16 頁。

<sup>23</sup> Baehr, *The Paradise Myth*. p. 33-35.

<sup>24</sup> コチェトコワによれば、ロモノーソフの頌詩は、プロコポーヴィチらの「俗化」した「頌歌説教 панегирическая проповедь」から語法、構成、題材、社会的機能などを引き継いだものであるという。Кочеткова Н.Д. Орагаторская проза Феофана Прокоповича и пути формирования литературы классицизма // XVIII век. Вып. 9. Л., 1974. С. 50-80.

語文化が流入する。ローマ・カトリックとの強い連想を伴ったラテン語文化受容の是非は、ロシア国家の方向性の問題と関連付けられ、エピファニー・スラヴィネツキーら「ギリシア派」とシメオン・ポロツキーらの「ラテン派」の対立をもたらした。

しかしながら、クナーベが述べるように、古典古代文化の内部のこうした「ローマ」と「ギリシア」の区別は、17世紀ロシアではイデオロギー的、政治的局面に留まるものであった。文化面においては両者の伝統はむしろ相互浸透し、古典古代の規範は統一体として認識されたのである。<sup>25</sup> ピョートルは新国家建設にあたってローマ帝国を範とし、18世紀のロシア国家は以後もローマ帝国のイメージを重視することになるが、こうした現象も、17世紀以来の「古代ローマ」へのアプローチを継承するものであり、イデオロギー的、政治的局面という枠を越えるものではなかったとすることができる。

そうした事情を反映する例として、ロモノソフの著作を挙げるることができる。彼はロシア帝権の擁護者として、モデルとしてのローマ帝国、ラテン語文化の意義にしばしば言及しており、モスクワ大学のカリキュラム案でも、ギリシア文化を吸収したローマの地位が、ヨーロッパ文化を吸収するロシアの地位に対応している点を強調する。<sup>26</sup> しかし、彼は同時に古代ギリシアへの大きな関心も示しており、それは例えば戯曲『デモフォント Демфонт』（1752）の創作といった点にも現れているが、18世紀ロシアにおける「古代ギリシア」のイメージの機能に関する重要な問題が特に凝縮されているのが、論稿「ロシア語における教会文献の効用に関する前書き」（1758）の以下の箇所である。

古代ギリシア語のこの上ない美しさや豊穡さ、荘厳さや力が高く評価されるものであることは、文芸学の愛好家たちが十分に指摘している通りである。ホメロスやピンダロス、デモステネスといった古代の人々やギリシア語で描かれた英雄の他にこの言葉で弁を振ったのは、偉大なキリスト教の教父や文筆家たちであり、彼らが崇高な神学教義や神に向け飛翔する熱のこもった歌によって、古代人の雄弁をさらに高みに上げたのである。<sup>27</sup>

古代ギリシア語の美しさを称えたこの部分で注目すべきは、「ホメロスやピンダロス、デモステネス」といった古代ギリシアの人々と「偉大なキリスト教会の教父」が、ギリシア語を介して並列されている点である。「ギリシア」を媒介とした古代ギリシアとビザンツの混交という要素が、ここに見られる点に注目したい。

さらに、続く以下の部分も重要な問題を孕んでいる。

スラヴ語で書かれた教会文献に通じている者にはよく分かることだが、我々は、旧約聖書、新約聖書、教父たちの説教、ダマスカスのヨハネの聖歌、その他諸々の作者の手になる正典の翻訳を通してスラヴ語の中いかに多くのギリシア語が入り込んでいるかを見ることができるし、そのことに基づいてロシア語をより豊かにすることもできる。ロシア語は、それ自体で十

<sup>25</sup> Кнабе. Русская античность. С. 92.

<sup>26</sup> Andrew Kahn, "Readings of Imperial Rome from Lomonosov to Pushkin," *Slavic Review* 52, no. 4 (1993), p. 748.

<sup>27</sup> Ломоносов М.В. Полное собрание сочинений. Изд. АН СССР, Т. 7. М.-Л., 1952. С. 587.

分に豊饒だが、スラヴ語を介してギリシア語の美しさを受容する資質をも備えている。<sup>28</sup>

ロモノーソフはここで、教会スラヴ語による教会文献を通して、ギリシア語とロシア語との間に継承関係が存在することを主張する。先の箇所、ギリシア語が古代ギリシア文化とビザンツ文化の双方に結び付けられたことを考え合わせると、この部分は古代及び中世のギリシアをとともロシア文化の源泉として措定する試みと解釈することが可能であり、特に古代ギリシア文化を「ロシアの文化的特殊性」という文脈に結び付けている点で注目に値する。

次章で概観するように、エカテリーナ期の詩文学における修辞、国家表象の特徴的な点として、「正教」「ギリシア」という項を介して古代ギリシアと18世紀ロシアを半ば恣意的に結び付けるという概念操作を指摘することができる。ロモノーソフのこれらの記述には、早くもその萌芽を見出す事が可能である。

### 3. エカテリーナ二世期のロシア国家の表象

1762年に即位したエカテリーナ二世は、数々の手段を用いて権威の誇示に努めた。その際、上述の古典古代をめぐる重層的なイメージが駆使されていくことになる。

まず見ておきたいのは、ヴェフテルの手になる「エカテリーナ二世即位記念メダル」である〔図版3〕。このデザインは、女帝の横顔を女神ミネルヴァに准えたものだが、それに加え、甲冑やその下から出た巻き毛といった、『スキピオの空想肖像』〔図版4〕<sup>29</sup>などの古代の英雄像に共有されたモチーフをも用いたものでもあり、即位当初のエカテリーナが、自らの君主像における古代ローマ的イメージを重視していたことを示している。

ミネルヴァはアストレイアと並び18世紀ロシアの女帝がよく例えられたローマ神話の女神だが、この戦争と学問の女神の形象は、学術の理解者を自称し、数々の対外戦争に勝利をおさめたエカテリーナ二世を称える頌詩や絵画作品において特に盛んに用いられた。1763年に多くの民衆の参加を見込んでモスクワで行われたカーニバル的大祝祭「勝利のミネルヴァ」も、こうした慣習に則って企画されたものである。<sup>30</sup>

そして1766年には、騎馬競技と呼ばれる宮廷スペクタクルが開催された。<sup>31</sup>

仮装して馬に跨った貴族が技を披露するこの見世物は、1662年にルイ14世がパリで開催した騎馬競技をモデルとする。後者は、ローマ皇帝に准えられた国王を頂点とする理想の国家像を演劇化する政治的なページェントで、その演出の趣旨は、「帝国の遷移」に基づく伝統的な君主制理念の延長線上にあった。エカテリーナの騎馬競技も、こうした政治

<sup>28</sup> Ломоносов М.В. Полное собрание сочинений. Т.7. С. 587.

<sup>29</sup> アンドレ・シャステル(辻茂訳)『人類の美術：イタリア・ルネッサンスの大工房1460-1500』新潮社、1969年、377頁。作者は不詳。フィレンツェ、ヴェロッキオの工房の人ともされる。

<sup>30</sup> 「勝利のミネルヴァ」については Wortman, *Scenarios of Power*, p. 119-120 を参照。また、エカテリーナをはじめとする18世紀ロシアの女帝とアストレイア、ミネルヴァ等の類推に関しては以下を参照。Baehr, *The Paradise Myth*, p. 38-40; Прокураина. Мифы империи. С. 57-104.

<sup>31</sup> この祝典やペトロフの頌詩に込められた象徴性、その文化史的背景などについて詳しくは拙稿「エカテリーナ二世の『壮麗なる騎馬競技』とペトロフの頌詩」を参照。

性とローマ的性格を受け継いだ、注意したい相違点は、これがギリシア的要素をも内包したという点である。例えば、開催を記念して発行された金メダルの裏面には、「アルフェイオスの岸からネヴァの岸まで」との銘文が刻まれていた〔図版5〕。<sup>32</sup>

この祝典を題材とするペトロフの作品『1766年、サンクト・ペテルブルクで催された壮麗なる騎馬競技に寄せる頌詩』が、「古代ギリシアと18世紀ロシアとの類推」「ギリシア的要素とローマ的要素の混合」といった手法を駆使し、エカテリーナの騎馬競技に古代ギリシアのオリュンピア競技の継承としての文化的象徴性を付与していたことは、既に別稿で述べたとおりである。

さらに、新たなロシア国家像の構築は、1768年よりオスマン帝国との戦争という事態に直面することで焦眉の課題となる。開戦直後の多くの詩においては、スマローコフの『エカテリーナ二世女帝陛下に捧げる頌詩。ホチーン陥落とモルダヴィア征服に寄せて』(1769)に見られるように、ビザンツの主題が前面に出ており古代ギリシアへの連想はほとんど排除されていた。<sup>33</sup> この作品のギリシア表象をめぐる点については別稿で論じたが、さらにもう一つ興味深い点を、以下の詩行に関して指摘しておきたい。

Романия, скорбя, не дремлет,	西ローマは悲嘆に暮れてまどろみもせず
Главу восточный Рим подьмлет.	東ローマが頭をもたげるだろう。
Европа видит новых чад.	ヨーロッパは新たな子孫にまみえるだろう <sup>34</sup>

ここでは、ビザンツ帝国が「東のローマ」として西ローマと対比されている。先述したように、ロシア国家は自らをしばしばローマ帝国に准えてきたが、このようにギリシア＝ビザンツ帝国が一方ではローマ帝国の後裔でもあることを強調する修辞は、「現代ロシアと古典古代の対比」という図式の中に「ギリシア」という要素を自然に嵌め込んでいく。即ち、ロシアがキリスト教を受け入れたビザンツ帝国とは、ギリシア的要素とローマ的要素の混合体に他ならず、この帝国とロシアの文化的な継承関係は、ローマとギリシアの両方の末裔という、ヨーロッパでも比類ない威信をロシアに与えることになるのである。

#### 4. 結語

スマローコフは、ギリシアという形象を古代ギリシア的連想には関連付けなかったが、後のペトロフやヘラースコフによって、ギリシアは古代ギリシアとビザンツとを内包した両義的な存在として意識される。こうしてエカテリーナ二世の時代には、ロシアが古代ギリシア文明、キリスト教文明、ローマ帝国の後継者として表象されるようになった。

ロシア国家のイメージのこうした再編成の背景には、本稿で素描したような重層的なコンテクストの存在を指摘することができる。もちろん、ここで概観したのはそうした背景

<sup>32</sup> アルフェイオスは古代オリュンピア競技会が開催された町オリュンピアの脇を流れる川。

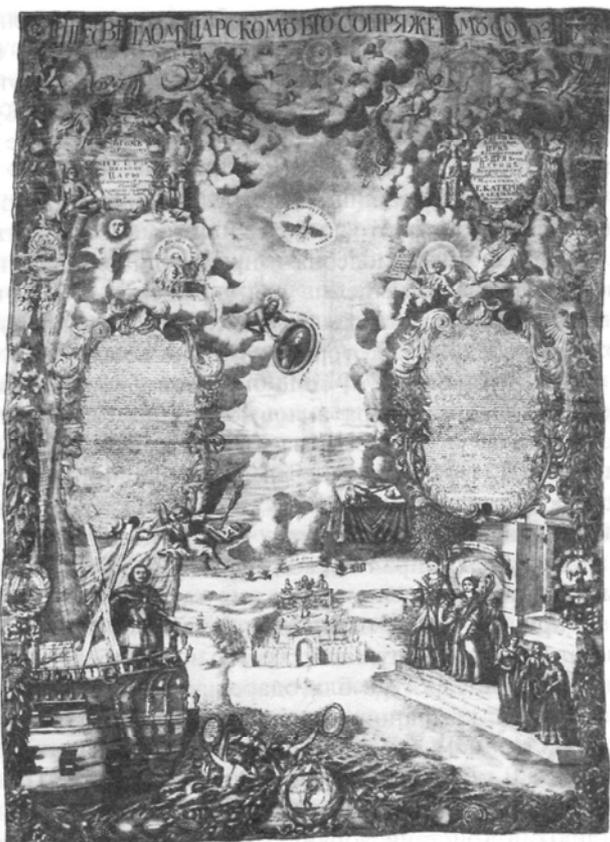
<sup>33</sup> 対トルコ戦争期のロシア詩に現れたロシア国家像に関しては拙稿「第一次対トルコ戦争期(1768-74)のロシア文学」を参照。

<sup>34</sup> Сумароков А.П. Избранные произведения. Л., 1957. С. 71.

のごく一部分にすぎない。とはいえ、18世紀後半のエカテリーナ期の文学や宮廷行事などに観察される、文化的統一体としてのロシア国家のナショナル・アイデンティティの萌芽とも呼ぶべき事象の多くが、中世西欧世界やモスクワ国家、カトリック文化や正教文化など、出自を異にする雑多な要素から成るアマルガム文化を基盤としていたことは、確かであると考えられる。<sup>35</sup>



〔図版1〕  
左：『救済の寓意』（13世紀）、  
右：『エリュマントスの猪を運ぶヘラクレス』（3世紀？）



〔図版2〕  
A. ズーボフ、ピカルト・コンクリュージャ  
『神により結ばれた至高なる皇帝夫妻の絆に』  
(1715)。  
A.Ф. Зубов, П. Пикарт. Конклюзия «Пресветлому царскому Богом сопряженному союзу».

<sup>35</sup> 本稿は平成18年度科学研究費補助金の助成による研究成果の一部である（課題番号18・325）。



〔図版3〕 ヴェフテル И.Г.Вехтер 「エカテリーナ二世即位記念メダル」(1762)



〔図版4〕 作者不詳 (フィレンツェの人) 『スキピオの空想肖像』(15世紀末~16世紀初頭)



〔図版5〕 「1766年の宮廷騎馬競技の記念卓上メダル」